The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜翻訳＞ パウル・ハッカー著『現代ヒンディー語における若干の助動詞の機能について』（中）
Author(s)	Hacker, Paul; 溝上, 富夫
Citation	大阪外国語大学学報. 1974, 30, p. 73-96
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80508
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

パウル・ハッカー著『現代ヒンディー語における若干の助動詞の機能について』

（中）

溝　上　富　夫（訳註）

PAUL HACKER: Zur Funktion einiger Hilfsverben im modernen Hindi

（2）

übersetzt und erläutert von **Tomio MIZOKAMI**

VI. uṭhnā

55. *uṭhnā* は「起きる，上昇する」という意味であって，助動詞としては，具体的上昇運動の現象をより輪郭的に描写するのに用いる。例：*panap uṭhnā*「芽ばえる」（種子が）；*bhaṛak* (*jal, bal, dahak*) *uṭhnā*「燃え上る」。具体的に「浴びせられる（又は，ている）」又は，比喩的に「（液体と考えられるある本性に）浸っている」という意の合成語 *nahā uṭhnā* の場合，「入浴（つまり，水を浴びること）の後，立ち上る」というもとの意味から出発できよう。

さらに，*uṭhnā* は音の現象をあらわす動詞と結ばれて，音が「高まる」ことをあらわす。例：

gāne bajāne kī maṅgal dhvani se gąv gąj uṭhe (Pr. *Sevāsadan* 330頁)「歌や管弦のめでたい音で，村々はどよめいた」

生物が声を「高めること」をあらわす動詞にあっては，その発言が激しく響いたり，又は思いがけなく起ることが強調されねばならないときに，*uṭhnā* が用いられる。例：

bol uṭhnā「突然言う」；*kah uṭhnā*「突然言う」；*pukār uṭhnā*「叫ぶ」；*cīkh uṭhnā*「叫ぶ」；

光の現象も又，「高まる」ものとして把握され，それ故 *uṭhnā* によってあらわすことができる。例：*jagmagā uṭhnā*「閃く，輝く」（例えば，星が）

56. 上にあげた *uṭhnā* 合成語の大半にあっては，「高まること」は比喩的である。*uṭhnā* は又，誇張表現においてと同様，全く比喩的であって，何らかの意味で「上へ」という意味要素を含む動詞表現にあって頻繁に用いられる。例：

ilāqe mę āg sulag rahī thī, havā pāte hī bhaṛak uṭhī[1]「イラーカー（区域）に火がくす

1 PREMCAND: *Premāśram*. 23頁。Banāras: Sarasvatī Press. 発行年不明。

ぶっていたが，風を受けるや，パッと燃え上った」

ここでの火の意味は，興奮や憤激の火である。

Salīm ne itne zor se pukārā, ki sārā ghar hil uṭhā (Pr. *Karmabhūmi*. 85頁)「Salīm は非常な大声で叫んだので，家中がゆれ動いた」

これはもちろん，誇張的な意味である。

mukh-kamal khil uṭhā (Pr. *Sevāsadan* 60頁)「蓮(はす)の（如き）顔が開花した」

vah apnī karuṇ netro se muskarātī hai aur kabhī-kabhī khilkhilākar hąs parṭī hai, tab us ke motī ke dąt camak uṭhte haį (Pr. *Sevāsadan*. 334頁)「彼女が慈悲深いまなざしで微笑み，時折哄笑するとき，彼女の真珠の（如き）歯がぱっと輝くのである」

us kā mukh prasannatā se camak uṭhā「彼の顔は喜びあふれるばかりだった」

ajñān-nidrā se jag uṭhnā「無知という眠りから目覚める」

57. しかし，*uṭhnā* の最も本来的な使用分野は，直接的又は比喩的に感情の惹起や，あるいは身体的表現をあらわす表現である。§56であげた例文のいくつかはもちろんこれに属する。さらに若干の例：

saham uṭhnā「おびえる」；*cakrā uṭhnā*「仰天する，あわてる」；*ghabṛā uṭhnā*「困惑する」；*adhīr ho uṭhnā*「落ち着かない」；*ūb uṭhnā*「いやになる」；*kātar ho uṭhnā*「気おくれする」；*vyagra, ātur, vikal ho uṭhnā*「うろたえる，あせる，途方にくれる」；*kṛtajñatā se, ānand se bhar uṭhnā*「感謝の念と喜びの気持で一杯になる」；

Śāntā kā hṛday kṣamā aur prem se umaṛ uṭhā (Pr. *Sevāsadan*. 266頁)「Śāntā の心は寛恕と愛にあふれた」

°*kī rūh (tabīyat) phaṛak uṭhtī hai*「…は完全に心を奪われている」；*us kā ḳhūn(rudhir) khaul uṭhtā hai*「彼の血は沸き立つ」；

manuṣya kī paśutā ubal uṭhtī hai「人間の獣性が現れる」（直訳：ふき出る）

jal uṭhnā, garm ho uṭhnā「沸騰する，興奮する，激昂する」；*pulakit ho uṭhnā*「体の繊毛が逆立ちするほど強く興奮する」；*kalejā (dil) masos uṭhā*「…は完全に打ちひしがれた」（特に苦しみや悲しみの感情によって）；*jhūm uṭhnā*「身をふるわす」(魅力のため)；*tilmilā uṭhnā*「狼狽する，狼狽していると感じる」；*caụk uṭhnā*「驚く」；*kąp uṭhnā*「震える」；*dahal uṭhnā*「たじろぐ，戦慄する」；*sihar uṭhnā*「おののく」；*ro uṭhnā*「泣く」；*tamtamā uṭhnā*（顔が）「赤くなる」；*āhat ho uṭhnā*「傷つく」

58. すべての文法は *uṭhnā* の機能を突然性(*suddenness*; *acānaktā, ākasmikatā*; *vnezapnost'*)の表現と規定している。しかしながら，今あげた材料から明らかになることは，多くの場合突然性は問題となり得ないということである。§55の文 *gāne bajāne*…を参照。それに反して，いず

れの例文でも基礎となるのは「上へ行く」という観念だといってよかろう。この助動詞の最も正しい定義を与えたのは BARANNIKOV であって（135頁），彼は「上昇運動や発展や，しばしば突然性の意味」（*značenije 'podnjatija, razvitija' i často 'vnezapnosti'*）について述べている。*uṭhnā* の補助によって述べられた現象が時折，「突然の」こととして捉えられる場合でも，主動詞の意味又は観念全体から突然性の要素を拡大発展させることが，*uṭhnā* の主要な機能とは思えない。主要な機能というのは，*bol uṭhnā* や *kah uṭhnā* の如き合成語と同様，つねにある種の心理的な「上昇」であろう。それ故，当然，予期されないこと，つまり「突然の」という付随的な概念を伴なって時折歩むことができるわけだ。注目すべきは，情緒を示すひじように多くの（すべてとはいわないまでも）表現にあっては，*uṭhnā* の代りに *paṛnā* が現れることである。「落ちる」ということも，外見上根拠のないこと，つまり予期されぬこと，すなわち突然的なものに対する一つの隠喩である。それはむしろ「上る」ことより一層本質的かもしれない。BARANNIKOV の「発展」という定義は，我々がすぐに話してよい最も現代的な言語用法に確かに関連している。

59. 今日の文献では，*uṭhnā* はどんな任意の動詞と用いてもいいようだ。その際，*uṭhnā* に固有の「上昇」という意味はある特別の方向において拡大されている。すなわち，*uṭhnā* はしばしば現象の増大作用，つまり発展を示す。次にこの例文を JAINENDRA KUMĀR から二つ，それから雑誌から二つ挙げる。

us (lekhak) ke sāmājik śakti ban uṭhne kī kam hī sambhāvanā hotī hai (*Sāhitya kā śreya aur preya* 288頁)「彼（作家）の社会的な力が高まる可能性はほとんどない」

ādmī amuk sąskṛti ke nām par adham ācaraṇ kar uṭhā hai (*Pūrvoday* 158頁)「人間は何かある文化という名において，下等な行いをするに至った」

ącāiyę par ṭhaṇḍhī havā kāfī tezī se bah rahī hai, jis se vahą rahnevāle pahāṛī logę kā jīvan durvah ho uṭhā hai「高地を冷たい風がかなり強く吹いている，このためそこの山岳地帯の住民達の生活は困難なものとなった」

yathārth jagat kī yathārthatā kā jo anubhav hotā hai, us ke kāraṇ man mę cintā ke sāth śaṅkā kā bhāv bhī prabal ho uṭhtā hai「現実世界の現実性の体験によって，心に心配と同時に疑念の気持も強まってくる」

従って，こういう結合にあっては *ho uṭhnā* は最初の例の *ban uṭhnā* と同様，「発展する」という意味をもつわけだ。

増大する力，又は発展の表現として *uṭhnā* が現在使用されるのは，ベンガル語の影響によって生じたのかもしれない。RĀMCANDRA VARMĀ は *Acchī Hindī* の167頁と236頁で，一連の *uṭhnā* 合成語を正しくないと咎めているが，残念なことに，異議をとなえた箇所がどう正しくあらねばならないのか，又，何故それらが言語精神に反するのかは示されていない。しかし，それらのいくつかは今観察したグループの一部なのである。例：

sāmrājyavād ab laṛkhaṛā uṭhā hai「帝国主義は今やぐらついた」(一つの発展が起った；167頁)

prajā kī abhūt-pūrva vṛddhi ho uṭhī「住民がかつてないほど増加した」(236頁)

後の例は R. C. VARMĀ によって，ベンガル語の慣習の影響を受けたものとして明確に示されている。[1] R. C. VARMĀ が167頁でいけないといっている，さらにいくつかの *uṭhnā* の合成語が何故言語感情に反していることになるのかは，例えば *vah jhīk uṭhā*（「彼は呻き声を上げた」）とか，*aṭṭahās ho uṭhā*（「大笑いが起った」）がいけないとされると，我々には理解し難いことである。

いずれにせよ，RĀMCANDRA VARMĀ のとなえている異議から次のことが分る：1. これまでのヒンディー語の慣用では，*uṭhnā* はすべての動詞と結ばれることができるわけではないこと，2. 助動詞の慣用においても，ヒンディー語はベンガル語の影響を受けているということ，3. *uṭhnā* の使用において，現在ある発展が進行中である。ある発展の徴候については，*ānā*（§45）のところでもみたし，又，*calnā*（§85）や *pānā*（§88）のところでもみるだろう。

VII. *ḍālnā*

60. *ḍālnā* は「投げる」という意味で，その助動詞としての機能は，*denā* と同様主動詞と一つの意味単位として融合している場合は，困難を伴わずに知り得るし，しかも大てい的確に記述されている。[2] すなわち，*ḍālnā* の暗示するものは，暴力的なこと，又は力に満ちたことの行動様式である。この行動様式が主動詞の意味に含まれている場合は，それは *ḍālnā* によって強調され，展開され，そして明確化されるのである。又，それが状況によって規定される場合は，*ḍālnā* に

1 ベンガル語で *uṭh-* がどんな機能をもっているかは，私の手に入った文法書では明らかでない。SUNĪTIKUMĀR CAṬṬOPĀDHYĀY は *Saṃkṣipta Bhāṣāprakāś*（10版. Kalikātā 1955）の311頁で，*uṭh-* の機能を *ārambha-bodhak, inceptive.* と規定している。J. D. ANDERSON は *A Manual of the Bengali Language*(Cambridge 1920) の35頁で，This compound implies growth, completion, achievement.（This is very common）と述べている。いずれにせよ，ベンガル語の *uṭh-* はヒンディー語の *uṭhnā* よりも，これまでのところ，はるかに頻繁に現れているようだ。その他のベンガル語の助動詞についても特別の研究が必要であろう。

2 KELLOGG（260頁）: *violence*; KĀMTĀPRASĀD GURU（939頁）: *ugratā*; HARLEY（*Colloquial Hindustani* 61頁）: *vigour, forcefulness*; THAKARDASS PAHWA（*The Pucca Munshi* 241頁）: *force, vehemence, or suddenness*(?).

誤っているのは：*Hindī Śabdasāgar*: *samāpti*; BARANNIKOV（134頁）:「分離」（*razdelenije*). BARANNIKOV は *toṛ ḍālnā* とか *kāṭ ḍālnā* の如き少数の動詞の意味によってまちがった観察を行なっている。分割の概念が主動詞に存在する場合でも，助動詞には存在もしなければ，「強化」もされないのである。分割の動詞にあっても，*ḍālnā* の使用を動機ずけるのは暴力的であることである。*ḍālnā* の合成語の翻訳にあたってしばしば有効なロシア語の接頭辞 *raz-* の機能を簡単に *ḍālnā* のそれと一致させるのはよくない。

よって行動表現へともたらされるのである。以下に *ḍālnā* の用法を分類して述べ，かつ若干の例を証拠として，*ḍālnā* 使用の主な動機又は意図を明らかにしたい。

61. それ自体暴力的なことを示す動詞は，ほとんど規則的に *ḍālnā* と組み合わされる。又，その行為が行為の性質に従って暴力的となり得るような動詞は——それが該当する場合にはいつも——*ḍālnā* と組み合わされる。例：

jalā ḍālnā「放火する」；*pīs ḍālnā*「押しつぶす，押し砕く」；*naṣṭ kar ḍālnā*「破壊する」；*nikāl ḍālnā*「投げ出す，追い出す」；*toṛ ḍālnā*「砕く」（「こわす」）；°*kā vadh kar ḍālnā*「を殺す」；*qaidī banā ḍālnā*「捕虜とする」；*kāṭ ḍālnā*「切り離す」；*cīr ḍālnā*「ひき裂く，裂く」；*kucal ḍālnā*「踏みつぶす，（*pairo tale* 足で）踏みにじる」；*mār ḍālnā*「殺す」（*mār baiṭhnā*「襲う」§70参照）；°*ko vikray kar ḍālnā*「売る」（例えば，彼の魂を「売る」に転用）；°*kā sarvanāś kar ḍālnā*「完全に破壊する」

cetāvanī denā「警告する」が *ḍālnā* と結ばれると，「するどい警告，きびしい命令を与える」，時としてはほぼ，「最後通牒を発する」という意味をもつ：

Purtagāl ko is āśay kī ek spaṣṭ cetāvanī de ḍālnī cāhiye ki vah ek niścit avadhi ke bhītar Bhārat-sthit apnī bastiyo ko khālī kar deve「一定期間内にインドにある彼らの植民地から退去すべしという意の，はっきりした最後通牒をポルトガルに与えねばならない」

pulis ke superiṇṭeṇḍeṇṭ ne Lālā Samarkānt ko bulākar laṛke ko sąbhālne kī cetāvanī de ḍālī (Pr. *Karmabhūmi* 28頁)「警察署長はL.S.を呼びよせて，息子を監督せよとのきつい命令を下した」

62. *ḍālnā* によって強調される暴力性は，しばしば，行為それ自体にあるというよりはむしろ次のことに本質があることもある。つまり，暴力性が少なくとも話し手の観点から，対象物又は，行為の対象あるいは行為にたずさわっている人にとって，あるいは又情況にとって何らかの点で強く不適当であるということである。例：

°*kā nām bec ḍālnā*「誰かの名前を売る」すなわち，会話で第三者の名前を挙げることによって，自分は人に好かれ尊敬されるようにしたいということ。又，侮辱する，名を汚すという意味。

この行為は，名前を「売られる」人の領分への一つの侵害である。

ある文芸欄で，*rās*（牧歌劇）はもともと世に知られていたことが記され，批評家はさらにつづけていう：

par varg-samāj ne use apne darśan kī alaukikatā mę raṅg ḍālā「しかし，階級社会がそれ（牧歌劇）を自らの哲学の超世俗性によって色ずけたのだ」

この現象はそれ自体，*raṅg lenā* によって表現され得ようが，しかし筆者の意図していることは，

たとえそれが偽造されたか又は歪曲されたものであろうとも，目的語の本質にとってこの現象が不適当であるということである。それ故，筆者は *raṅg ḍālnā* を必要とするのだ。

Baṅgāliyǫ ne unhę Baṅgālī banā ḍālā「ベンガル人達によって，彼はベンガル人にさせられた」

すなわち，彼はベンガル人でなかったし，ベンガル人になったこともないが，事実に反して，彼はベンガル人としてすえられたのである。（それに対応する自動詞は *ban baiṭhnā* である。§69参照）

maiṇe Āp kā sarvasva lūṭ liyā, khā-pī ḍālā (Pr. *Sevāsadan* 169頁)「私はあなたの全財産を強奪して飲み食いに蕩尽しました」

ここでは珍しく，助動詞の前に二つの語幹がある。ここでの行為はその過度故に暴力的なのであり，又，他人のものを所有するのを全うすることによって，一つの不正行為を含む故に暴力的なのである。

kuch logǫ ne to Premcand ko kāṅgres kā pracārak tak kah ḍālā hai「いくらかの人々は Premcand をコングレスの宣伝者とさえいいきった」

すなわち，事実に反して人々は彼がそうであると主張したのである。

ham sąkoc ko choṛkar apne sambandh mę aisī-aisī bātę kah ḍālte haiṇ ki jin ke gupt rahne hī mę hamārā kalyāṇ hai (Pr. *Sevāsadan* 207頁)「我々は遠慮をすてて，我々自身のことについて，秘密にしておいた方が我々の幸せになるようなことを喋って洩らしてしまう」

この行為は倫理に反しており，行為者自身を傷つけている。

ある対話において，AがBによって，傍らにいるCがきかないように小声で話すように頼まれる。AはCがヒンディー語が分らないと述べる。そこでBが：

dūsre koī kah ḍālęge「外の誰かが（そのことをCに）打ち明かすでしょう」

大声で喋ったなら，Aの利害に対して侵害を招き得るだろう，とBは考えるのである。この意味で，その行為はその観念において暴力的である。

ghar kī dīvārǫ par miṭṭī se kavitā likh ḍālnā「家の壁に土（色合）で詩を書く」——場所も手段も行為にとってふさわしくない。この例は §63のグループに入れてもよかろう。

aisī ceṣṭā phir bhī hotī hai, yānī, vyakti ko binā dhyān mę liye samāj ko sudhār ḍālne ke prayatna ṭhān liye jāte haiṇ (JAINENDRA KUMĀR. *Pūrvoday* 160頁)「それでもなお，こういう努力が生じる，すなわち，個人を顧りみずに社会を改革する企てがなされるのだ」

この改革は方法の不適性故に暴力的である。

is saptāh unhǫne ek kāvyamay bhāṣaṇ kā uttar dene ke liye Hindī mę ek kavitā bhī

rac ḍālī「今週，彼は詩を沢山使った演説に答えるために，ヒンディー語で詩をも書いた」議会で詩をよむのは異常なことであり，普通でなく，不適当である。

63. *ḍālnā* によって示される暴力性の本質はしばしば，ある行為が内部的又は外部的な抵抗にもかかわらず，又は可能な抵抗を顧慮することなく，あるいは又，ある種の不幸な状況にもかかわらずなされるということである。

jo kām karnā hī hai use kar ḍāliye (Pr. *Sevāsadan* 74頁)「どうしてもやらねばならない仕事をなさって下さい！」

この話し手（女性）は彼女の客人が欲していることに全然同意していない。上の言葉で彼女は不承不承に同意するのだ。彼女には抵抗がある。彼女が *kar ḍāliye* といえば，私の意向だけを無視せよ，ということが暗示されるのである。

us ke bād āj tak paidal-yātrā dvārā unhǫne uttar Bhārat kā kāfī baṛā hissā ghūm ḍālā hai (*Bhūdān-Yajña.* 序文 3頁)「その後今日まで，徒歩で彼（VINOBĀ）は北インドのかなり大きな部分を廻った」——このような道程が意味する困難にもかかわらず。

°*kī ḳhāk chān ḍālnā* 字義通りには「…の埃を濾過する」（従って，何か気持に逆らうことをすること）すなわち，長時間かけて徒らにさがすこと，又はむだな努力をすること。

jab ve kisī nirṇay par pahuc lete[1] *to use kar ḍālne mę phir āgā-pīchā na socte the*「彼はある結論に達すると，それを実行するのに前後をよく考えてみなかった」

この行為は可能な抵抗を顧りみることなく起っている。

apne samay mę apnā kām kar ḍālne par ve aise vivaś ho jāte haiṇ...「(ある作家達は)自分達の時代に自分達の仕事をすることをこうして余儀なくされる…」

この時代関係は，可能な抵抗がもともと本質的でない程度に，その行為を強いるのである。

bhayānak rog se pīṛit hone par bhī unhǫne ek kavitā likh ḍālī「恐しい病気に苦しみながらも，彼は一つの詩を書いた」

jahą̄ kahī huā kavitā likh ḍālte the「どこにいても彼は詩を書いていた」—— しばしば思わしくない状況にもかかわらず。

vah agar apne kamal netrǫ mę ą̄sū bhare hue merī or tāke to maiṇ us ke liye kyā na kar ḍālągā (Pr. *Sevāsadan* 214頁)「彼女が蓮の如き（美しい）目に涙を一杯ためて私の方を見つめると，私は彼女のために何をなさずにおれましょうか」——あらゆる可能な抵抗を押して。

paṛh ḍālnā は「解読する」を意味することができる。すなわち，抵抗を克服して——この合成話のもう一つの意味：

---

1 *pahuc lenā*（自動詞と結ばれる *lena*!）はここでは明らかに，頻繁に使われる *nirṇay kar lenā* の影響によるものである。

Subhadrā vah lekh paṛhne lagī aur pāc minaṭ mę us ne use ādyopānt paṛh ḍālā (Pr. *Sevāsadan*. 274頁)「Subhadrā はその書類を読みはじめた，そして五分間で始めから終りまで通読した」

その行為がなされる迅速性は，抵抗を克服することを含んでいる。

64. 抵抗の克服はしばしば，何かある偉大な行為がなされることを意味する。それ故，ある行為が大きなものとして感じられ，あるいは又，真実であろうと皮肉であろうと，「大きい」こととして述べられる場合に *ḍālnā* が使われるのが普通である。抵抗が克服され何か暴力的なこと又は好ましからざることがなされるという観念は，その際意識されない。例：

kuch log ‚apne vyaktigat jānkārī' ke ādhār par hī baṛī-baṛī bātę kah ḍālte haị (*Acchī Hindī* 223頁)「ある人々はただ自分の個人的な知識をもとにして，大きな話をするのです」

prem apne ko de ḍālne kī āturatā ke sivā kyā hai (J. Kumār. *Prastut Praśn*. 273頁)「愛とは自分を捧げたいというもどかしい欲望をおいて外に何があるのか」

ve kuch aisī cīz bhī de ḍālę jo hamārī daridratā ko sadā ke liye jalā degī (*Satsaṅg-sudhā* 30 頁)「神は我々の貧困を永久に焼失するような偉大なもの（字義通りには，一つのこのようなもの）も授け給わんことを」

vah apnā sarvasva de ḍāltā hai「彼は全財産を与えてしまう」

VIII. baiṭhnā

65. 助動詞としての *baiṭhnā* の機能の研究は，特に必要と思われる。何故なら，この助動詞ほど文法の説明が互いに錯綜している助動詞は外にないからである。Kāmtāprasād Guru (396頁) は *dhṛṣṭatā* を示すと述べ，Kellogg (260頁) によると *permanence* を示すということであり，Barannikov(136頁)によると「行為の完全な発展」(*polnoje razvitije dejstvija*) を意味するということである。学習書の著者のうちでは，Harley (*Coll. Hindustani* 61頁) が，*baiṭhnā* は *completeness* 又は *suddenness* をあらわすと考え，それに対して Th. Pahwa (*The Pucca Munshi* 242頁) によると，1. *imprudence and regret*, 2. *force* をあらわすという。*Hindī Śabdasāgar* やいくらかの文法は，助動詞としての *baiṭhnā* を全然扱っていない。Vale (*Verbal Compounds* 95頁) の考えでは，*baiṭhnā* は *continuatives and completives* と同様 *intensives showing suddenness* を示すという（しかし，これとほとんど同じ機能を *jānā* についても書き加えている！)。これらの見解が特別ちがいすぎることのわけは，明らかに，一群の差異が動詞 *baiṭhnā* のもとの意味から出発していることにある。すなわち，「座る」という観念からおそらく Kellogg は「継続」の概念をひき出したのだろうし，Barannikov は「行為

の完全な発展」，HARLEY は「完全性」の概念をひき出したのだろう。それに対して，二人のインド人 K. P. GURU と TH. PAHWA——部分的には HARLEY もそうだが——の考え出した規定，「大胆さ（不遜）」「突然性」「無思慮性」「遺憾」それに「力」は多かれ少なかれ，言語感情を正しく観察することから発生したように思える。

66. この錯綜した現象を明らかにする効果的な方法は，「簡単な方の」助動詞の際に得られた諸結果を利用しなければならないであろう。そして又，まず第一に問わなければならないことは，どんな種類の動詞の場合に *baiṭhnā* が多少共規則的に現れるか，これらの動詞の意味における共通的なものは何であるか，それらの動詞はどんな目的語をもっているか，どんな副詞的規定がつけ加わっているかということであろう。このようなことから次に，ヒンディー語の重複語的傾向にもたえず注意を払いながら，ごくたまにのみ *baiṭhnā* と組み合わされる動詞においてもまた，*baiṭhnā* の機能の解明が生まれるだろう。

67. *baiṭhnā* はしばしば，「失う，放つ，放棄する，破滅させる」を意味する動詞，つまり *khonā, gạvānā, hārnā, °se hāth dhonā, choṛnā, °kā nāś karnā.* によく現れる。このような結合にあっては，目的語として具体的なものをめったにとらないようだ。具体的なものをとる場合には，その具体的な目的語は何かひじょうに包かつ的なものであるか，あるいは又，具体的な目的を規定する語が，ことばとして明言されたものを越えていくところの何かあるものを暗示する。両者の場合，意味は「抽象的なもの」に近ずいてくる。この種の具体的な目的語の例：

> *...ādhyātmikatā...jis mẹ ādmī kapṛā tak choṛ baiṭhtā hai* (*Pūrvoday* 160～161頁)「人が着物まで放棄してしまうという…精神性…」

「着物」はここでは，着物を意味するだけでなく，物質的所有物の総体の最後の代表という意味である。

> *...is kā yah āśay nahī hai ki ham dīn-pālan kī dhun mẹ ilāqe se hī hāth dho baiṭhẹ* (Pr. *Premāśram* 20頁)「これは我々が貧しい人々を助けるのに熱心な余り，根本所有（一般に）を失うという意味ではない」

根本所有の総体，根本所有「一般」がここで意味されている。外の目的語を動詞と共に挙げると：

> *himmat hār baiṭhnā*「勇気を失う」；*hoś havās gạvā baiṭhnā*「正気を失う」；*apnī śakti kho baiṭhnā*「自分の力を失う」；*smṛti kho baiṭhnā*「記憶を失う」；*sudh kho baiṭhnā*「意識を失う」；*icchāśakti par niyantraṇ kho baiṭhnā*「意志力の抑制を失う」；*indriyọ ke subhog ke lie apnī ātmā kā nāś kar baiṭhnā*「感覚器官の享楽のため自分の魂を滅ぼす」；*apne pūrva rūp ko kho baiṭhnā*「以前の形を失う，やめる」；*apnī pṛthak sattā ko gạvā baiṭhnā*「自立権をなくす」；*ādmiyat se hāth dho baiṭhnā*「人間性を放棄する」；*maị apne sāhityik hone se inkār karne kā haq chinā baiṭhā* (*Sāhitya kā śreya aur preya* 75頁)「私は自分が文学者であることを拒む権利を奪いとった」；

hamāre samāj ne Hindū jāti (ko)...us uccāsan par biṭhā diyā hai jise vah apnī akarmaṇyatā ke kāraṇ kaī śatābdiyo se choṛ baiṭhī thī (Pr. *Sevāsadan* 246頁)「我々の（神智）協会は，ヒンドゥー社会を，それ（ヒンドゥー社会）が自らの無気力性故に幾世紀も前から断念していた（失っていた）高い地位に座らせた」；

āstikatā choṛ baiṭhnā「信念をすてる」；*svāsthya kho baiṭhnā*「健康を失う」；*naukrī se hāth dho baiṭhnā*「勤めをやめる」

これらの動詞合成語のすべての目的語——大半は精神的な性質，それに健康という重要な身体的性質，さらに秩序とか境遇（権利や地位），それから一般的な基本的なもの（形や存在）である——は次のような種類のものである。すなわち，目的語が非常に密接に存在と結びついているので人がそれを不承不承あきらめるか，あきらめるべきでないか，あるいは又，自分を放棄することなくあきらめることができないということである。このような損失と一致する気持の状態が *baiṭhnā* によって強調されるものだと思える。何故なら，「座る，腰を下す」ことは，当惑，少なくとも「遺憾ながら」いわれる感情，そして *udās baiṭhtā hai* とか，*jī(dil) baiṭh(ā) jātā hai* といった場合の気持を表現し得る一つの身ぶりである。その身ぶりが助動詞としての *baiṭhnā* の使用といかに直接かかわっているかは，PREMCAND の次の文章からも説明できる：

us pathik kī bhāṭi jo din bhar kisī vṛkṣ ke nīce ārām se sone ke bād sandhyā ko uṭhe aur sāmne ek ūcā pahāṛ dekhkar himmat hār baiṭhe... (*Sevāsadan* 5頁)「日中ずっとある木の下でゆっくり眠った後，夕方に目を覚まして前方の高い山をみて勇気を失うあの旅人のように…」

ところで，失う意の動詞に *baiṭhnā* が使われることは，今再構成しょうと試みた *baiṭhnā* の基盤になっている根元状態を，つねに直接示しているかというと決してそうではない。失う人が自分の損失を惜しんでいることが状況の前後関係からして，ありそうもないということさえしばしばある。又，時として，それが生きている物でないから彼がその損失物を全然惜しむことができない。例：

ḳhālis urdū ke saikṛo śabda aise haiṇ jo apne pūrva rūp ko ekdam kho baiṭhe haiṇ[1]「純粋のウルドゥー語の何百という単語はもとの形（ペルシャ語においてもっていたところの）を完全に失ったものである」

このような場合，当然，*baiṭhnā* の機能を知るのが大層困難になるが，しかしそれでも，失うということは人が困った状態に「おかれる」何かであるという観念は，損失特に非物質的なものの損失が *baiṭhnā* を常につけ加えることによって，より切実に表わされるにいたるように思える。いずれにせよ，二番目のグループとして（§68）観察したいと思っている諸結合例によって確証されることは，この観念が *baiṭhnā* の使用の基礎になり得るということである。もともと *kho*

1 Padmasiḥ Śarmā: Hindī, Urdū aur Hindustānī (Ilāhābād: Hindustani Academy 3版, 1951) 4頁。

baiṭhnā は *biṭhā denā*「座らせる」のように一つの独立した意味単位ではなかろうし，「失った後，すわる」と解かれよう——*kah jānā* が「言った後，立ち去る」であるように。このことと一致することは，*jānā* と同様 *baiṭhnā* の場合，過去形の構造を決めるのは助動詞であって主動詞でないということである：*vah kho baiṭhā.*

68.「不幸にして」という気持——遺憾の念，失望，立腹——は，時折前後関係の結果として一義的に生じ，そこから他の場合にも承認され得るというように，他の動詞の場合にも *baiṭhnā* によって示される。例：

socne ko maiṉ ṭhīk soctā hū̃, par karte samay ṭhīk ulṭā kar baiṭhtā hū̃「考えることは正しく考えるのですが，しかしいざ実行の段になると，私は（あいにく）正反対のことをしてしまうのです」

「あいにく」という気持はこの文では，文章全体を通して疑いの余地なく明白だから，翻訳で入れることができる。

idhar durbhāgyavaś mahākāvya kā praṇetā Cand kar baiṭhā thā akṣam aparādh aitihāsik kāvya likhne kā「一方，不幸にして，叙事詩の創始者 Cand は歴史的詩を書くという許せない罪を犯した」

すなわち，彼は，インドには歴史がないという西洋の批評家の理論には「残念ながら」（*durbhāgyavaś*）あたっていなかったけれども，それをしたのである。

この文章は皮肉的であり，強く感情に形成されている——それは倒置によっても示唆されているように。

hamāre deś mẹ to lambe arse se paracakra hī ek svābhāvik sthiti ho baiṭhī hai[1]「我国では，長い間，不幸にして外国支配が当り前の状態となっている」

ここでも又，「不幸にして」が文脈によってまさしく要求されているのである。

...jis ke caraṇọ par vah kalpanā mẹ apne ko arpaṇ kar cukī thī, usī se vah is samay tan baiṭhī (Pr. *Sevāsadan* 283頁)「…彼女が空想の中で身を捧げていたその人と，今や彼女は自負心から（そして彼女自身にとって遺憾なことに）不和となった」

彼女は自分の姉とひじょうに密接に結びついていると感じていたので，彼女がその断絶を遺憾に思っていたにちがいないことは明らかである。

遺憾の気持と関係があるのは，*baiṭhnā* が往々にして恐怖の動詞と現れることである。例えば§69の第一文例及び第六文例（*is bāt kī...* と *jo thoṛī...*）ならびに次の文例を参照。

mujhe ḍar lagtā hai, ki kahī̃ banā-banāyā kām bigāṛ na baiṭhū̃ (Pr. *Karmabhūmi* 110頁)「もしかしたら，もう出来上っている事をだめにしないだろうかと私は恐れる」（それが私次第ではないので）

途方にくれること，「私はどのようにしようとも，それは間違いとなろうことをおそれる」とい

1. K. Gh. Maśrūvālā: Jīvanśodhan, ヒンディー語訳 (Ahmadābād: Navajīvan 1949) 31頁。

う気持を次の文章の中で *baiṭhnā* が表現しているのである。

us daśā mẹ na jāne kyā kar baiṭhū? (Pr. *Nirmalā* 21頁)「この（悲しい，どうしょうもない）状態で，私は一体何をすべきか分らない」

69. §67と§68で挙げた表現はすべて，示されたものが本来的に存在すべきものでないという考えを，多少共含んでいる。このことから，何らかの意味で偽りつまり正しくなく，不適当で，許容しがたく，不相応で，欺瞞的なこと等を表わす動詞に *baiṭhnā* が現れる一連の合成語が明らかとなる。「偽り」の概念はしばしば何らかの表現をとってことばで表わされている。このような場合から出発して，他の助動詞のところでしらべたことを利用して，「偽り」の概念が *baiṭhnā* によっても表わされることが結論ずけられることができるのである。さらに，*baiṭhnā* によってのみ「偽り」の概念全体から展開される場合の結合が明らかとなる。このような合成語にあっても，大ていは，遺憾なこと，腹立たしいことが存在している。§68で挙げた例文のうちの最初の三つは，ここでもう一度挙げてもよかろう。何故なら，§68でも，何らかの意味で偽りであることが問題になっている。ところが又，偽りの観念が遺憾のそれを凌駕し，又は完全に排除するというような文章もあるのだ。このようなことについて眺めよう。*jānā*（他動詞につく場合）や *ḍālnā* のところでも，何かがある点で偽りである場合にこれらの助動詞がしばしば使用されることをみた。しかしこのような場合，三つの動詞にある根本感情は非常に種々様々である。*jānā*の場合は，「遠くへ行きすぎる」という他の概念によって，「偽りである」という観念がもたらされ，*ḍālnā* の場合は暴力性によって，*baiṭhnā* の場合は遺憾あるいは又，§72でみようとしている大胆さによってもたらされる。例：

is bāt kī bhī śaṅkā hai ki ham aise caritrẹ ko na citrit kar baithẹ jo siddhāntẹ kī mūrtimātra hẹ (Pr. *Kuch Vicār* 41頁)「原則の具体化にしかすぎないような性格を我々は描写してしまわないかという懸念もある」

そのことは，叙事詩の本質にとっては不適当なのだろう。

ham kah baiṭhte haị ki ,Prabhu se rog-mukti ke lie prārthanā kyā karẹ? (*Satsaṅg-sudhā* 23頁)「我々は（不相応に）言う：病気からの救済を神に祈ってどうするのだと」

文脈で明らかなのは，筆者はこの考えをふさわしくないこととしてながめていることである。

yah fatvā de baiṭhte haị (*Satsaṅg-sudhā* 27頁)「彼らは（筆者によって偽りと考えられている）この判断を下す」

Maithil bhāṣā kā pūrṇ jñān na hone ke kāraṇ ve sab prāyaḥ aśuddh pāṭh aur bhramātmak arth de baiṭhe haị「マイティリー語の十分な知識がないために，彼ら（Vidyāpati の作品の編者達）は皆，大ていまちがった読み方をしてまぎらわしい意味をつけ加えてしまった」

偽りの概念はこの文では，ことばとしていい表わされている。次の例文の初めの四つも同じであ

る。

Indra brāhmaṇ ke veś mę ākar chal se *kavac aur kuṇḍal māg baiṭhte haį*「インドラ神はバラモンに身をやつしてやって来て，術策をもってよろいと指輪を乞う」

jo thoṛī bahut (Hindī) jānte haį unhę barābar bhay rahtā hai ki ve galat *samajhkar* kuch kā kuch *likh na baiṭhę*「多少共ヒンディー語を知っている人達（議会の会期に出席している新聞記者達）はいつも，誤って理解して，（いわれたことと）全くちがったことを書きとめはしないかと恐れている」

mohavaś *vah (manuṣya) ise (=śarīr ko) apnā samajh baiṭhtā hai* (BhP. 7, 2, 42)「眩惑にかられて，人は身体が己れのものだと考えるのだ」

log Vidyāpati ko Vaiṣṇav mānne kī bhūl *kar baiṭhte haį*「人々は Vidyāpati をヴィシュヌ派の信徒と誤って思う」

jise Āp jvālāmukhī parvat samajh baiṭhe haį vah keval bujhī huī āg kā ḍher hai (Pr. *Sevāsadan* 311頁)「貴方が火山だと思い込んでいたものは，ただの消えた火の積み重ねられたものにすぎない」

ham deh kī pūjā ko hī apnā sādhya mān baiṭhe haį (*Gītā-Pravacan* 23頁)「我々は身体を崇めることが自分達の修業の目的だと思っている」

jo indriyę ke sukhę ko hī sarvasva mān baiṭhā hai (BhP. 7, 6, 13)「官能の喜びだけがすべてと思っている人は…」

最後の二つの例文では，「偽りであったり，…をふさわしくないと考える」という概念は，*mān baiṭhā honā* によって表わされている。だから形は完了でも意味は現在である（いわば「彼らは腰を下した，一方考える…」）。強調文にあっても又，*baiṭhnā* の完了形が現在形の代りに規則的に現れる（§83参照）。つまり，それはより一層活力的で印象的なのである。

最後にここで，ひじょうに慣用的な合成語 *ban baiṭhnā* を挙げなければならない。その意味，「として振舞う，のような態度をとる」[1]は，その現象がある意味で「偽り」であるという観念が，非常に頻繁に *baiṭhnā* の使用の基礎になっていることが認識される場合にしか，見出されない。例：

jise apne ghar sūkhī roṭiyą bhī mayassar nahį vah bhį bārāt mę jākar tānāśāh ban baiṭhtā hai (Pr. *Nirmalā* 9頁)「我家ではひからびたパンさえ手に入らない男でも，結婚の行列に加わると独裁者のように振舞うのだ」

1　私が一部はたえず，一部は時折利用した十冊の辞書（§4の注6を参照）のうち，ひじょうに説明の必要なこの合成語を書きとめているものは一冊もない。*Bṛhat Hindī Koś* は単一語の *bannā* 等について，*jo bāt apne mę na ho, us kā pradarśan karnā* という意味を与えているが，この意味が *baiṭhnā* によって明白にされ，その際，合成語は述語名詞と結ばれるということを述べていない。調べた二十一冊の文法書と学習書のうち，PAHWA (244頁) だけが *ban baiṭhnā* を正しく説明している。GREAVES (288頁) の説明は全く誤っている。

pāc hī chaḥ mahīne mẹ vah vilāsitā kā drohī, vah saral jīvan kā upāsak, acchā ḳhāsā raīszādā ban baiṭhā (Pr. *Karmabhūmi* 22頁)「半年たらずで，あの奢侈を敵としていた人，質素な生活の信奉者だった人が立派な豪族の息子のように振舞った」

ban jānā の代りに *ban baiṭhnā* が用いられていることで，この発展がほんとうでなかったことが暗示されるのである。

70. 分類にあたっては，形は他動詞に従いながら一つの被害，つまり密接に主語に属するある本質を失わせること等を示すところの動詞から出発した。そこから *baiṭhnā* が「遺憾」の気持や「偽り」の概念を説明する場合の結合を理解しょうと試みた。しかし，§69の分類は又，§67のグループと反対に，強く能動的な他の種類の動詞とも内容的に関連して用いられることができよう。つまり*baiṭhnā* は，ある人間の個人的領域への強い侵害を表わす動詞にも頻繁に現れるということだ。それらは，部分的には§67に分類したものと，丁度積極的対立をなすものである。いいかえると，*haq chinā baiṭhnā*「権利をはく奪させる」は§67のグループに属し，*haq chīn baiṭhnā*「ある人から権利を奪う」は，今観察しようとしているグループに属する。*tan baiṭhnā*(§68の第四例[...*jis caraṇẹ*...])「(その人自身の遺憾なことに) 仲たがいする」については，二人の関与者は消極的であるのと同様に，積極的でもある。この合成語は §68にも，又ここに入れてもよい。加害を示す動詞のさらにいくつかの例：

corī kar baiṭhnā, curā baiṭhnā「盗む」; *ve is ke liye corī, chal, kapaṭ sab kuch kar baiṭhte haị* (Pr. *Sevāsadan* 117頁)「彼らはこのために盗み，だまし，詐欺等何でも（悪い行為を）あえて行うのだ」;*dāb* (*dabā, le, pacā, haṛap*) *baiṭhnā*「(他人の所有物を）不正に獲得する，抑留する，だます」*āghāt kar baiṭhnā*「一撃を加える」; *ākramaṅ kar baiṭhnā*「攻撃する」; *hāth choṛ baiṭhnā*「力ずくで攻める，格闘する」; *mār baiṭhnā*「つかみ合いする，打つ，不正に獲得する」; *upadrav kar baiṭhnā*「騒動をおこす」; *ātmahatyā kar baiṭhnā*「自殺する」; *ujaḍḍapan kar baiṭhnā*「無作法をする」; *kā aparādh kar baiṭhnā*「の罪を犯す，侮辱する」; *ḍāṭ baiṭhnā*「おどす」; *nindā kar baiṭhnā*「とがめる」; *kah baiṭhnā*「あてこすりをいう，当意即妙の意外な答えでだまらせる，口走る」——最後の意味の例：

vah apnī māmī ke iśārẹ par dauṛtī thī, jis mẹ vah mātā ko kuch kah na baiṭhe (Pr. *Sevāsadan* 117頁)「彼女は母に何も打ち明けないように，(何でものぞみを実現するために）伯母の合図によって走っていた」

§67 で示した身ぶりは *baiṭhnā* のこの機能を基礎とし得ないことは明白である。§67の若干の動詞が，ここで扱った動詞に対応する自動詞であるとの観察によって，この機能が §67の分類から由来することもまずない。この事実は，*baiṭhnā* が暗示することがらを知ることがさらに加わるということを意味する。加害を示す動詞にあっても，座っているとか座るとかいう観念が基

礎になっていると，確かに想像されるにちがいないが，しかしそれは§67で解明したのとは別の種類である。ここでの出発点は，ある動物たとえば犬が他の動物をいかに襲うかを観察することであり得よう。つまり，それは，たとえば，*caṛh baiṭhnā*「おそう」によっても明白に示されるように，文字通りには，その上に座るということである。つまり，加害性を示す動詞にあっては，*baiṭhnā* はドイツ語でも同じような観念を用いるとすれば „Zusetzen“（苦しめる）である。「圧迫」を意味する動詞の場合も，この助動詞の使用は明らかである。例えば次の文では，合成語 *dabā baiṭhnā* の意味は，文字通りの意味「押えて，その上に乗る」に大変近い：

nidrā kā dev use dabā baiṭhā (Pr. *Sevāsadan* 43頁)「眠りの神が彼を打ちまかした」

同様に，*ghus baiṭhnā* についても，*baiṭhnā* のもとの意味が考えられる：

marne kā to itnā ḍar hamāre man mẹ ghus baiṭhā hai (*Gītā-Pravacan* 23頁)「死に対する大きな恐怖が我々の心に入り込んで根を下した」

71. 加害性を示す動詞によって，「偽り」の概念を含む動詞合成語のすべて，又はいくらかも又，すでに示唆したように，明らかになるかもしれない。つまり，何か偽りのことをすることは，わずらわしいことと感じられていよう。しかし，これらのグループ（§69）は遺憾の気持（§68）及び損失の動詞（§67）と関連させるのがより正しいと私には思われる。もっとも，頻繁に現れる *pūchnā*「たずねる」に *baiṭhnā* がつく場合には，*baiṭhnā* は攻撃の動詞の *baiṭhnā* と事態が同じであることは確かだ。その都度問題なのは，たずねられた人又は語り手によって，わずらわしいこと，穏やかな侵害と感じられるということである。その問が人を立腹させるように作用するときは，再び§68の分類の一つの結合が存在する。時々，たずねられた人自身が立腹して，わずらわしいと感じていることがことばに表わされることがある：

yadi vah koī paṛhā huā śabda pūch baiṭhtā to Śarmājī jhallā paṛte (Pr. *Sevāsadan* 71頁)「彼（Śarmā の甥）が読んだことのある語（読書したときは理解できないと思った）をたずねると Śarmā 氏は腹を立てたものだ」（それは彼にとってめんどうだから）

「立腹する」の概念は *paṛnā* と組み合わされている。§52参照。

72. 最後に，任意の動詞にあって，その行為が大胆に，不遜に又は何らかの別の方法で強弱の差はあれ，わずらわしさをもって為されるということ，又その行為は勝手にすることであって，不快なこととして働くものであることが暗示される場合に，合成語の中に往々，*baiṭhnā* が現れる。これらすべての場合は，内容的に§70と§71の分類と同じである。「座っている」の第三の身ぶりの観念が§70と§71の分類の基礎になっていることも有り得よう。つまり，挑発的に座っている，ということである。§83の例文参照：

kahānī mẹ sacmuc ek pātra lekhak kī apratiśodhya ayogyatā ke kāraṇ bhāṣaṇ ‚karne‘ kī jagah us bhāsaṇ ko ‚dene‘ kī himmat kar baiṭhā thā (*Sāhitya kā śreya aur preya*

291～292頁）「短篇小説の中で，実際に，ある登場人物が，作家の度し難い無能さのため，（ヒンディー語浄化主義者ののぞんでいるように）演説を『する』代りに，（英語でそう言えるように）演説を『与える』ことを，大胆にもしたのだ」

ab san '28 mę maị phir ekāek kaise likh baiṭhā（同上289頁）「1928年になって，私がふともう一度筆をとるなんてことにどうしてなったのだろう」

udhar se chuṭṭī milī, to (tum) yah pacṛā le baiṭhe (Pr. *Karmabhūmi* 29頁)「休みになったのなら，ここで劇場を作ってみるがいい」

vah dil mę jhụjhlā rahī thī ki ammą kyọ in se merā dukhṛā le baiṭhị（同上39頁）「彼女は心の中で立腹していたしそして自問していた――お母さんはこの人に何故私の悲しい身の上話をしたのでしょう」

73. 我々は *baiṭhnā* 合成語の二つの基本的なタイプ――すなわち，損失の動詞と攻撃の動詞をみた。両者共，*baiṭhnā* がきわめて規則的に現れる。だから，その他の使用例も，できる限りこれらのことから推量することは明白だ。派生として明らかとなったのは，遺憾，偽り，大胆さ，挑戦の概念である。二つの基本的なタイプの基礎となっているように思われるのは，「座っている」又は「座る」という二つの異なる身ぶりである。しかし，「座っている」のさらに三つ目の態度が *baiṭhnā* 合成語の構成の誘因になっているかもしれない。つまり，黙って，執拗に，挑戦的にそこに座っているということである。ここから *baiṭhnā* が不遜等を強調している若干の結合が明らかにされ得よう。「座っている」又は「座る」のどんな身ぶりが *baiṭhnā* 合成語の誘因になっているかを，個々の場合について規定するのは，もちろん困難なことである。組み合わせることと混合することで見当がつくだけである。*ḍālnā* によって構成される合成語の場合と全く同様に，*baiṭhnā* 合成語も情緒を強調することがしばしばある。

さて，文法の様々な説明をふりかえると，二人のインド人 KĀMTĀPRASĀD GURU と THAKARDASS PAHWA がこの場合，実際に言語感情を正確に眺めていることが明らかになる。両人共，*baiṭhnā* の機能のすべての可能性を注視しているわけではないにしても，KĀMTĀPRASĀD の定義「不遜」(*dhṛṣṭatā*) と PAHWA の定義 „imprudence and regret" は，*baiṭhnā* 合成語のかなり大部分にあてはまっていることがある。PAHWA の „force" という説明は，加害性を示す動詞に適用できると思うが，しかし「力」という概念は，*baiṭhnā* がこれらの結合の中でもっている機能の規定としては不正確すぎる。ただ注目すべきことに，どの文法書も *baiṭhnā*がひじょうに頻繁に「偽り」（大胆な，そして又遺憾ながらなされる偽り）の概念を動詞から発展させることを述べていない。全く誤っているのは，言語感情と調査なしに抽象的に組み立てられたものだから，ヨーロッパ人の文法学者と VALE の *baiṭhnā* の説明である。[1]

1 例えば HARLEY と VALE の「突然性」という説明がいかに間違っているかは，次の文章（ある宗教上の論文から引用）が的確に証明している。
yah smṛti bhī ham dhīre-dhīre *kho baithte haị*「この記憶も私達は次第に失うのです」

IX. 強　　調

74. これまで扱ってきた八つの助動詞は，語幹との結合の場合のみを観察したのであるが（§46を例外として），これらの構造以外にもそれらのうちのあるものは，他の不定動詞形との結合においても現れる。その際，それらは話法の助動詞の機能あるいは又，相を示す機能をもつことになる（例えば，*denā* は変形不定詞と共に，*jānā* は現在分詞と共に）。このような機能については，ここでは考慮に入れないことにする。語幹として他の独立形と結ばれる助動詞のしくみを研究しなければならない。かなり頻繁に（語幹よりは相当まれであるが）助動詞——詳しくは *denā*, *lenā*, 他動詞の場合の *jānā*（及び *ānā*），そして *ḍālnā* と *baiṭhnā*——との結合に現れるのは，*-e* で終る独立詞，すなわち，外見上は過去分詞の斜格形に似ており，ある完結された行為によって達せられた状態を表現する形である。さらに，*jānā*, *ānā* と *paṛnā* はしばしば自動詞の過去分詞と組み合わされるが，このしくみについても観察しなければいけない。二つのしくみ——*-e* 独立詞との結合と，自動詞の過去分詞とのそれ——はその働きが大部分一致するので，PAHWA（*The Pucca Munshi* 311頁）がしているように，一括して扱われてよかろう。それらは，ある現象が普通よりも客観的に推移することを表現しようとしているか，あるいは又，ある行為又は状態が強く心に思い浮かべられることを暗示しようとしているので，強調として示されてよかろう。そこから，いくつかの可能な意味のニュアンスが明らかになる。[1]

75. その次に *baiṭhnā* 合成語を助動詞として含むところの *-e* 独立詞を含む合成語（§83），それに又，自動詞の過去分詞の *jānā*（*ānā*）それに *paṛnā* との結合は，現在分詞の使用によって形成される形においてのみ現れる。さらに命令文や，第二の助動詞としての *rahnā* との構成において現れる。

助動詞としての*denā*（又は „Ātmanepada“ の *lenā*）との *-e* 独立詞合成語はしばしば，その行為が，単一語又は語幹＋*denā*（*lenā*）の合成語が示すよりも客観的により強くなされ又はなされたことをあらわす。例：

---

1 KELLOGG は（他のヨーロッパ人の文法学者と同様）自動詞の過去分詞との結合を挙げていない。*-e*独立詞結合の機能を彼は（§754, 3, 448頁）„throwing a special emphasis on the leading verb“. と記述している。Emphase，つまり主観的な強調化は*-e*独立詞合成語によって意味され得るが，しかし，この形がある現象が客顧的に力強く推移することをあらわすことになっている場合もある。従ってEmphaseよりもIntensivierung についていった方がよい。

KĀMTĀPRASĀD GURU（§419, 402頁）は *-e* 独立詞結合を *niścay-bodhak*, 語幹との結合を *avadhāraṇ-bodhak* と記している（§15参照）。しかし *niścay* と *avadharāṇ* のちがいは大きくない。*Saḳṣipta Hindī Śabdasāgar* は *avadhāraṇ* を *niścay* でおきかえている。

PAHWA（*The Pucca Munshi* 311頁）は自動詞の過去分詞との構造と同様，これを „Extra-Intensiva“ と名ずけているが，すでに語幹との合成語に「強調」という術語が使われていたときにも，結局のところ，それと全く同じような命名をしなくてはいけないことになる。

naukar-cākar ghar kī sampatti uṛāye dete the (Pr. *Mānasarovar* 3, 25頁)「召使達は家の財産をむだ使いしていた」

maiṉ tum se kahe detā hū̃「私は君に対して断言する」

yah maiṉ tumhẹ batlāe detī hū̃ (*Citralekhā* 36頁)「このことを私はあなたに明言しておきます」

khaṛī bolī vyākaraṇ ke anek kaṭhin prayogọ ko ve sarvathā choṛe dete haiṉ[1]「Khaṛibolī の文法の多くの難しい用法を彼ら (Bāzārū Hindustānī をしゃべる人々) は完全にすて去っています」

最後の例では，強調化は動詞以外にも，副詞 (*sarvathā*) によって表わされている。

-e で終る独立詞は行為の完全な結果，行為の結果としての一つの状態の達成を強調する。*denā* との結合においては従って，「一つの完結したものとしての行為を放棄する」という意味が明らかになる。その行為は普通よりも完全で完結的であり，同じく通常の場合よりもそれがより精力的になされることが推量される。それは，語幹につく *denā* によってひき起された他動詞性の概念の明白化を越えた，強調化としてはっきり示されうる一つの明らな高まりである。

76. 同じように，自動詞の過去分詞と *jānā* (*ānā*) それに *paṛnā* の結合は，ある現象が強く推移し，主語がその現象に巻きこまれ，それと掛り合いになっていることを意味することができる。これに属するのはよく使われる *dauṛā jānā* である：

vah tezī se dauṛā jā rahā hai「彼は速く向うへ走っている」；*ḳhabar milte hī vah aspatāl dauṛā gayā*「知らせを受けとるや，ただちに彼は病院へ走った」。外の例：

jyọ-jyọ ūpar uṭhnā cāhtā hū̃, aur nīce dabā jatā hū̃ (Pr. *Sevāsadan* 203頁)「上へ登ろうと思うほど，ますます下へ押しやられます」

sab ke sab is veśyā ke hāv-bhāv par miṭe jāte the (Pr. 同上42頁)「皆ことごとく，この娼婦と遊ぶのに夢中になっていた」

barf piglī jātī hai (PAHWA 311頁) „The ice is fast melting."

merā bāzār girā jā rāhā hai (Pr. *Sevāsadan* 98頁)「私の経済状態は継続的に悪化している」(つまり，景気が下落傾向を有している)

bhay se citt asthir huā jātā thā (Pr. 同上229頁)「恐(こわ)さのため彼の心は落ち着かなかった」

形に従えば，よく使われる合成語 *calā jānā*「立ち去る」もここに挙げてよかろう。しかし，その意味はごく陳腐であって，それ自身に本来的に強調の意味はない。それは単に，用いられない *jā jānā* の代りをなす規定形にすぎない。*calā* は，他の運動のより緊急的な描写の場合にもおかれる。例：

---

1 Sunītikumār Caṭṭopādhyāy: Bhārat kī bhāṣāẹ..., Mahādev Sāhā によるヒンディー語訳 (Ilāhābād: Hindi Bhavan 1951) 77頁。

vah dauṛā calā jātā thā「彼はそこへ走っていったものだ」

77. 第二の助動詞としての *rahnā* との結合においては，強調化が意図されていなくて，単に二つの語幹の衝突が避けられているだけと思えることがしばしばある。例：

preya śabda ko maiṉ ṭāle de rahā hū (*Sāhitya kā śreya aur preya.* 7頁)「私は『好ましい』という言葉を傍にしりぞけようとしています」

maiṉe is viṣay mẹ do pustakẹ paṛhī haiṉ jin kā nām maiṉ Āp ko nīce likhe (*likh* でなく) *de rahā hū*「私がこの事に関して読んだ二冊の本の名前をあなたのために下に書きましょう」

78. *-e* 独立詞を含む合成語は，ある客観的に強い現象を述べるよりも，単に強く表象されるある現象を表現するのに用いられることの方が頻繁である。その場合に時として大きな眼目となるのは，直接に面前にさし迫っている何かあることであり，それは空想をいきいきと刺激する結果，現在形で，かつ *-e* 独立詞の使用によって，本来すでに起ったこととして述べられるのである。このような結合には，*denā, lenā,* 他動詞につく *jānā*（及び *ānā*）そして *ḍālnā* がつく。さらに *jānā*（*ānā*）及び自動詞の過去分詞につく *paṛnā* も又，ある状態が直接面前に存在し又は，一つの傾向，性癖が起ろうとする傾向が存在することを暗示することができる。例：

-e 独立詞と *denā*：

(*maiṉ*) *Āp kī cintāẹ kā ant kiye detā hū* (Pr. *Sevāsadan* 123頁)「(私は) 貴方の心配を（すぐに）なくしてあげます」

maiṉ abhī-abhī terā sir dhaṛ se alag kiye detā hū (BhP. 7, 8, 14)「私は今すぐお前の頭を胴体からひき離してやる」

calo klās mẹ, maiṉ fīs diye detā hū (Pr. *Karmabhūmi* 3～4頁)「教室に入りなさい，私はすぐに授業料を（お前のために）払ってあげよう」

-e 独立詞と *lenā*：

is vaqt to maiṉ ye rūmāl liye letā hū (同上87頁)「今すぐに私はこれらのハンカチを手にとりましょう」

他動詞の *-e* 独立詞と *jānā*：

(*maiṉ*) *gāṛī choṛe jātā hū* (Pr. *Sevāsadan* 351頁)「(私は)車を（ここに）とめておきます」

-e 独立詞と *ḍālnā*：

kyā is kṣaṇ-bhar ke netra-sukh ke liye tū apne bhaviṣya jīvan kā sarvanāś kiye ḍāltā haiṉ? (同上218頁)「この瞬間の目の慰みのためにお前は自分の将来の人生をほろぼしてしまうのか」

is bālak ko maiṉ abhī māre ḍāltā hū (VP. 1, 19, 16)「この子供を私はすぐに殺してしまお

う」

自動詞の過去分詞と *jānā*：

(*tum*) *āte kyǫ nahį? pakauṛiyą ṭhaṇḍī huī jātī haį* (Pr. *Karmabhūmi* 47頁)「どうして（お前は）来ないのか。Pakauṛī（えんどう粉から作る一種の食物）が冷えますよ」（冷たくなろうとしている）

us se bātcīt karne mę merī kyā heṭhī huī jātī hai? (Pr. *Sevāsadan* 32頁) 直訳：「彼女と話をすれば，どんな不名誉が生じようとしているか（それはどんな不名誉であり得るか）」

abhī khānā taiyār huā jātā hai (Pr. 同上28頁)「すぐに食事の用意ができます」

ab ek hī do sāl mę yah kurīti miṭī jātī hai (Pr. 同上5頁)「ここ一，二年のうちに，この悪習はきっとなくなるでしょう」

ab kahne mę kyā bigṛā jātā hai (Pr. 同上262頁)「今，君がそのことをいっても，何の害があるというのか（何がだめになろうとしているのか）」

自動詞の過去分詞と *paṛnā*[1]：

divār girī paṛtī hai (PAHWA 311頁) „The wall is threatening to fall."

上述のいくつかの例においては，直接面前に存在することは，強調以外に，副詞の使用によっても表わされている。

79. *ḍālnā* 及び *jānā* が他動詞と使われる場合，*-e* 独立詞は誇張的な表現に好んで用いられる。この場合も，現象は強く表象されるのである。例：

use yah bhay khāye jātā thā ki... (Pr. *Sevāsadan* 338頁)「…という恐れが彼女をさいなめていた」

us ke sammukh jāne kā bhay, us se ąkhę milāne kī lajjā mujhe māre ḍāltī hai (同上28～59頁)「彼女に出会うという恐怖，彼女と目を会わせるという恥しさのため，私は死にかねない」

---

1 KĀMTĀPRASĀD GURU (§408, 393頁) はこれらの結合を *tatparatā-bodhak*（「用意ができていること，志向を示す」）とよんでいるが，その場合はそれらの諸機能のただ一つの可能性についてあたっているだけで，§76で扱った，又§80で扱う予定のものにはあたっていない。*Hindī Śabdasāgar* は次のように説明する（*paṛnā* のところで）：*jis prakār vyāpār ke ghaṭit hone ke lagbhag yā sadṛś vyāpār sūcit karne ke liye kriyā kā rūp bhūtkālik karke tab us ke sāth ‚jānā' lagāte haį..., usī prakār ‚paṛnā' bhī lagāte haį...*「ある行為がほとんど生じ，又は同じような行為が起ることを示すのに動詞を過去形にしてから *jānā* をつけるように…，ちょうどそのように *paṛnā* も付加される…」。ここで述べられていることは，§80で扱う *jānā* と *paṛnā* の機能の可能性に当っているだけだ。*jānā* 又は自動詞の過去分詞との結合を考慮している三冊のインド人による著作から明らかになるのは，これらの構造の機能の可能性のうち，一つか二つにすぎない。13頁の注1参照。

80. しばしば，自動詞の過去分詞と *jānā, ānā, paṛnā* との結合においても又，比喩的又は誇張的表現に用いられることがある。*Hindī Sabdasāgar* (78頁の注1参照) の説明に従うと，「ほとんど」とか「おおよそ」あるいは又「あたかも」といった概念のみがここで付け足して考えられるのである。そして実際，「あたかも」「さながら」(*mānǫ*) がことばとして表現されている文章の中で，これらの結合が現れることもしばしばあるのである。例：

jānā と：

baccā māre ṭhaṇḍh ke us kī chātī mę ghusā jātā thā (Pr. *Mānasarovar* 5, 4頁)「子供は寒さのため（ほとんど）彼女の胸にもぐりこんでいた」

vah is aparādh se dabe jāte the (Pr. *Sevāsadan* 118頁)「この罪は重荷のように，彼を圧迫していた」

yah sockar us kā hṛday vidīrṇ huā jātā thā (同上261頁)「こう考えて，彼女の心臓は（ほとんど）引きさかれようとしていた」

Śāntā ko aisā mālūm huā ki mānǫ vah athāh sāgar mę bahī jā rahī hai (同上)「Śāntā には，さながらはかりしれない深海へと流されていくように思われた」

duḥkh se merā kalejā phaṭā jātā hai (同上282頁)「苦しみのため，私の心臓は（ほとんど）裂けんばかりだ」

ānā と：

merā kalejā to abhī se umṛā ātā hai (Pr. *Nirmalā* 143頁)「私の心臓はすでにもう（ほとんど）あふれようとしている」(すなわち，私は全く動揺している)

paṛnā と：

vīr-vṛtti us ke rom-rom se ṭapkī paṛtī thī (*Gītā-Pravacan.* 42頁)「英雄性が彼の全細毛から（ほとんど「文字通り」）したたりおちていた」

§76，§78及び§80を注意。

自動詞の完了分詞と *jānā* との結合の三つの機能と混同されてはならないのは，時々現れる自動詞の主語を欠いた受動形である。これも確かに，ある力強い表現法を表わしている。例：

isī tarah dukān par baiṭhā jātā hai? (Pr. *Karmabhūmi* 41頁)「それは店に座るという意味か」(直訳：このように座られるか)——つまり話しかけられた人は店を閉じて立ち去っていたでのある。

tum se na rahā jātā (Pr. *Sevāsadan* 260頁)「君はとどまることができない」(君によってとどまられないだろう) ＝君はそれに耐えることができない。

jān-būjhkar āg mę nahī kūdā jātā (Pr. *Karmabhūmi* 21頁)「わざと火にとび込めないものだ」

81. *jānā* との結合において，他動詞の *-e* 独立詞は往々，一つの強調化された機能も，一種の相

を示す機能も併せもつ。このような合成語は徹底的そして精力的な行為と同様，連続的永続的な行為を示す。例：

maị aise logọ ko bhī jāntā hū̃, jo aṅgrezī ke vidvān hokar apnā dharm-karm nibhāye jāte haị (Pr. *Karmabhūmi* 42頁)「英語がよく出来ながら，自分の宗教的義務を誠実に果しているような人達も，私は知っています」

vah to nahī̃-nahī̃ kiye jātī hai (同上93頁)「彼女はいつも，反対ばかりしている」

vah mallāh kī ḳhuśāmad kartī hai, us ke pairọ paṛtī hai, rotī hai; lekin vah yah kahe jātā hai: tere lie yahą̃ jagah nahị hai (Pr. *Nirmalā* 7頁)「彼女は船頭におべっかを使い（彼の心を動かして乗せてくれるように），彼の足にひれ伏し，泣くが，船頭は再三再四『あんたの乗る場所はここにねえ』というだけだ」

82. *jānā* と *ānā* はしばしば，自動詞と同様他動詞の *-kar* 独立詞と結ばれてこうなる。つまり，二つの動詞のもとの意味——「行く」と「来る」——も又，確かに意味されるが，しかし同時に，主動詞の一つの強調化された表現が明らかになるのである。例：

yah log Āp ko choṛkar kabhī na jāęge (Pr. *Karmabhūmi* 78頁)「この人達は貴方を決して見捨てないでしょう」

Bhagavān mujhe choṛkar cale gaye (BhP. 7, 4, 39)「神は完全に私を見捨てた」

kal hī vah chūṭkar āyā thā (Pr. *Nirmalā* 15頁)「やっと昨日，彼女は自由の身になったところだ」

もう一つの例は §39の最後の例文にみえる (*dekar cale gaye*)。

これらの表現において，実際に起る「立ち去る」又は「来る」も発言されるというまさにこのことによって，真の強調すなわち，その行為が特別多量に，最終的又は完全であることをあらわす形式が生まれるのである。ここで，まだ完全に完成されていない強調の機能をもった一つの構造があると思える。このことを示しているのは，それがまだインド人文法家によって述べられていないという事実のみならず，なかんずく，次のような事情でもある。つまり，それは今日まで，具体的な立ち去るとか又は来るとかをひき起こしたり又はそれらを含む諸現象に関して述べるためにのみ使われたという事情である。これらの構造においてはヒンディー語は，未来と過去の強調をも又くみ立てる可能性を求めていると私は想像したい。完了分詞と *jānā* の強調はもとより，*-e* 独立詞の強調に全くよくあてはまっているのは，上述の §75の1の公式である——もっともそれはしばしば二つに分れるが。例：

is tarah (maị) us kahānī ko likhe calā gayā, to ban gaī ‚Parakh‘ (*Sāhitya kā śreya aur preya* 13頁)「(私は) こうしてその短篇を (ついに) 書き終えました。そしてできたのが 'Parakh' です」

それでも一般に言語感情は，ある *-e* 独立詞と *jānā* の未来形又は過去形との結合を許容しないように思える。今あげた JAINENDRA の文章は，彼が単一の *gayā* の代りに，*calā gayā* を用いていることによっても注目に値する。全く同様に，過去形における *-kar* 独立詞の強調は通常，限定の *calā gayā* によって代用される。

過去形における強調形で，主動詞（自動詞）の *-kar* 独立詞と二つの助動詞（*uṭhnā paṛnā*）が使われていて，全く特別に印象的なのは：

ve caukkar uṭh paṛe「彼らは全く驚いて立ち上った」

83. *baiṭhnā* によって形成された強調も又，*-e* 独立詞と共に現れることがある。もちろん，私が観察し得たこの形態の数少ないケースと，*denā, lenā, jānā, ānā, paṛnā, ḍālnā* との類似した合成語とは，二つの点で区別される。一つには，それらは意味に則して真の強調であり，従って，他の助動詞の *-e* 独立詞との大ていの合成語のように，声明や又は誇張ではない。第二に，それらの形式は，他の *-e*独立詞の強調にあっては普通であるように，助動詞の現在分詞を含まずに，それらは皆，*baiṭhnā* の過去分詞によって形成されている。ところで，まさに *maiṃ baiṭhā hūṃ* は一義的に「座っている」（私は腰を下した，I am seated）であり，この強調形態は明確に，座っているという一つの態度を示しており，座るというふるまいを示しているのではない。（同様に *mān baiṭhnā* の場合もそうである。§69の例文 *ham deh...* 及び *jo indriyo ke...* 参照）そして，若干の例文においては，主語が実際に，具体的に「座っている」のである。この座っているということがしばしば当惑や困惑（§67—68の如く）の表現のことがある。外の使用の場合，§72で眺めたケースと§69のケースのいくらかと同様，当惑して座る，又「圧迫する」と並んで *baiṭhnā* の使用の誘因となったであろう第三の「座っている」の態度をみつけることが明白である。つまり挑発的と感じられ，黙って座っていることである。例：

a）挑発的，実際にそこに座っていること：

yah gavārin apne man me na jāne kyā samjhe baiṭhī hai (Pr. *Sevāsadan* 25頁)「この田舎女が一体どう考えているのか分らない」——又は：「彼女がそんなにじっと座っている時，彼女が何を考えたか」

この文章は，軽蔑的な *gavārin* の使用の結果からも生じているように（実際は，そういわれる女性は都会人である），感情を強調している。語り手（女性）は，彼女が期待しているほど注目されないことに腹立てているのである。

b）挑発的だが，実際に座っているのではないこと：

sārī burāiyo kī jaṛ hote hue bhī yah log sasār ke ṭhekedār kaise bane baiṭhe haiṃ?「あらゆる悪の根元でありながら，この人達は世界をひとり占めするようなことがどうしてできるのか」

この文では，*baiṭhnā* は自動詞 *bannā* についている。*bane* は過去完了の男性複数形ではないかという疑問がもたれようが，しかしより真実らしいのは，慣用的な言いまわしの *akṛe baiṭhā honā*「強情な，片意志を張る」(*zidd karnā*) 及び *aṛī kiye baiṭhā rahnā*「不動の姿勢でじっと座っている」における *-e* の形のように，*bane* は *-e* 独立詞なのである。

tum to laṛkọ kī tarah akṛe baiṭhe ho (TIVARĪ, *Muhāvarā Koṣ*)「君達は全く子供みたいに強情（意志っ張り）だ」

最後の例は，座っているという三番目の態度について，ある *baiṭhnā* 合成語の基礎をなすものと考えることが特に明らかである（§73参照）。

c) 途方にくれること，実際にそこに座っていること：

tīnọ... man māre baiṭhe the (Pr. *Karmabhūmi* 117頁)「三人共全部そこに座った，そして感覚を亡くした」(つまり，途方にくれ，絶望的だった)

TIVĀRĪ の *Muhāvarā Koṣ* によると，この慣用表現は *-kar* 独立詞と，*baiṭhnā* に *jānā* をつけ加えたものによっても形づくられ得る：すなわち *man mārkar baiṭh jānā.*

tum sab-ke-sab ek bil mẹ ghuse baiṭhe ho (Pr. 同上)「君達皆，一つの穴に隠れた」

これについても又，*Muhāvarā Koṣ* は *-kar* 独立詞との組み立てを明らかにしている。つまり *ghuskar baiṭhnā.*